
MOON-4 夜叉 < 9 > 第 1 部完

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOON - 4 夜叉<9>第1部完

【Nコード】

N6660M

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

遂に和人と桜との一騎打ちが始まった。
ヴァンパイア
現代版吸血鬼伝説 MOON『夜叉』第1部完結です。

6・満月 - 2 (前書き)

『夜叉』 第1部完結です。

6・満月 - 2

「朝子さん。」

裕希はベランダの扉の前に立ち、「何かおかしいよ、今夜。」

「どういう事？裕希くん。」

カウンターキッチンの席を立ち、彼に寄りそう朝子。

「何か、変な月だし・・・あそこ。」

と、プリンスホテルの方向を指差し、「たぶん和人と秀さんがいる所だよ。炎がいつぱい飛んでる。」

「本当だわ。」

彼女の言葉と同時に裕希はベランダの扉を開けた。春の生温かい風が室内に流れ込んで来る・・・そこに、桜の花びらがのっていた。

「・・・・・・」

その一枚を手に取り、じっと見つめる裕希。

そして、

「朝子さん、和人と秀さんの所に行こう！やっぱりいつもの吸血^{ヴァンパイア}

鬼との鬭いと違うよ！」

「ええ！」

朝子は頷き、2人は玄関へと向かった。

「あなたなんか嫌いよ、和人！」

桜はピンクのドレスの裾を翻して、右手から和人に向かい紅い炎を放った。

難なくよける、和人。

和人も青白い炎をその手に宿し、桜へと攻撃を続ける。

バツ・・・

ビルの側壁が碎け散る。

「お前たちの目的は何だ！」

彼は叫んだ。桜はスカートの裾に散ったコンクリートの破片をちらつと見つめてから、

「ただ貴方が嫌いなだけ。」

桜も炎を和人に向かい放ちながら、ビルからビルへと深夜の街を飛び回った。

それに気付く『人々』は誰もいない――

「貴方は私が欲しいものの全部持ってっちゃうんだもん！」

桜の攻撃が一層激しさを増す。

和人のすぐ脇を光が通る。

「九桜も秀も。私が欲しかったものの全部持ってっちゃうんだもん、だから貴方なんか嫌い、いらない！」

そう叫ぶと桜は両腕を胸の前に組み、大きく開いた。

「!.....」

桜の花びらが――あるはずのない桜の花びらが和人の周囲を取り巻いた。

その渦に巻き込まれ彼は一瞬、桜を見失った。

「ここよ。」

あどけない声に振り返ると、

ざっ.....

和人の脇腹に桜の長い爪が差し込まれた。

「つつ.....!」

和人は苦痛に顔を歪め、素早く身をひいた。血が地上に向けて滴り落ちる。

（何者だ、桜は。）

隣のビルの屋上へと飛び込み、片膝を付く。

（『直系』――ただの『直系』じゃない、九桜の。）

「――誰だ、お前は。」

目を細め、和人は問いかけた。

「ふふ・・・」

少女はあどけない笑みを浮かべ、「私の名は桜・・・貴方も知ってるはずよ。」

「何!？」

中空での会話。

そこへ、地上では一台の赤いレガシーと天空では秀と榊が引き寄せられる様にして集まった。

「来るな、秀!」

和人は叫んだ。

「和人、その桜って奴は・・・」

秀がそこまで言うのと、傍らの榊が彼の胸に爪を食い込ませた。

「・・・」

秀の体がのけぞる・・・「え・・・」

「榊!」

それを見て桜は叫んだ。「秀に手を出しちゃだめ!」

「判ってるよ、お嬢。」

バランスを崩した秀の体を支えながら榊が答える。「ちょっとした、悪戯さ。」

「和人、秀っ!」

地上から朝子の声が聞こえた。

「朝子っ!」

その声に気付き、和人は叫んだ。「駄目だ!来ちゃ駄目だっ!」

「もらったわ!」

桜は微笑んだ。

振り返る和人。

その右手に『香木』が握られているのを確かめた刹那、

ザクッ・・・

「・・・・・・」

和人は桜の花びらの中にいた。
月が。

紅の色を宿す月が大きく輝き、都会では見る事のない天空の星々
が大きく瞬いた。

「朝かしら。」

眠っている『昼の人々』が目を覚まし、皆カーテンを開いた。

「何だ、まだこんな時間じゃないか。」

昼間の仕事に疲れた人は、時計の針を眺めまた眠りにつく。

またある人は、ベランダに出て、

「何かしらこの光。」

天体観測を始めたりする。

新宿の街を――光の渦が埋め尽くす。

裕希は目を見開いた。

見上げた光の洪水の中心に、和人と桜の姿があった。

桜は和人の胸に抱かれていた。

その意味が始め、裕希には判らなかった。

ただ――ゆっくりと、和人は桜を手放しバランスを崩してい
った。

「・・・・・・」

裕希は彼が『落ちる』場所へと走り寄った。

舞い落ちる、無数の桜の花びらと共に、和人も路上に音も無く落
ちてきた。

「和人・・・・・・？」

固く目を閉じたままアスファルトに横たわる彼に声をかける。

「・・・・・・ねえ、和人！」

「和人！」

朝子も走り寄り、そして2人は気付いた。

その左胸に突き刺された『桜の樹木』の『香木』に。

「・・・・・・・・やだ・・・・・・・・」

朝子は眠る和人の両肩に手をかけて激しく揺らした。「ねえ、起きてよ、和人！」

何度もそう叫ぶ。

ナニガ オコッタ ノ・・・・・・・・

裕希は茫然とそんな光景を見つめるだけだった。理解出来なかった。

「これで」

天空から舞い降りた桜が彼らの前に立つ。

榊も意識を失った秀を抱き、近づいて来た。

「秀は私のものね、和人。」

くすくす・・・・・・・・とあどけない笑みを浮かべる桜。

「何をしたんだ。」

裕希は顔を上げ、桜を睨みつけた。「何をしたんだ！和人と秀さんに！」

「坊やは関係ないよ。」

榊は微笑んで答えた。「大人しく家に帰る事だな、篠原の御曹司。」

「そうそう！たかが人間ごときに何が出来ると思って？」

そう言って桜が笑った時、

パシッ

彼女の左頬に痛みが走った。

「・・・・・・・・」

桜は茫然とした。「・・・・・・・・ぶった。たかが人間ごときが。」

「解らず屋は嫌いだよ！」

朝子と和人を背後に、裕希は榊と桜の前に立ちはだかった。
まるで2人を守るかのように。

「我がまま！」

「……」

「絶対に和人と秀さんは俺が助けてやるからな！桜とか言っただけ？」

俺、あんたの事大嫌いだから！和人や秀さんや朝子さんをこんな目にあわせて、それでもまだ物足りないっていうんだっただけ。」

裕希は右手をもう一度振り上げた。「絶対許さない！お前たちを倒してやる！」

「坊や。」

榊は頬を押さえる桜と裕希との間に入った。

「そこまでにしとくんだな。少々『闇』を知りすぎたらしいね。」

「あんたもひっぱたかれないの？」

今度は榊を睨みつける、裕希。

「今夜は」

榊は告げた。「俺たちの勝ち。それだけは認めて欲しいね、人間の坊や。」

「人を大切にするのに『闇』も『光（人間）』もない、大切だから、守りたいから、闘うんだ。」

「嫌いって言ったわ、榊。」

桜は呟いた。「嫌いってこの子言ったわ。」

「戯言だよ、人間の。」

「人間、人間ってそんなに『闇』が素晴らしくて大切なものなの！？」

「裕希くん……」

朝子は和人を抱きしめ、そんな裕希を見つめた。

「今夜は負けかもしれないけど、榊、俺、絶対、和人を助けてみせる……あんた達を倒してみせる。たかが人間だなんて思わせや

しないっ!!」

「そう。」

柊は笑みを隠し、

「出来るのかな、そんな事。」

桜は視線を戻した。「どう？お嬢。」

「・・・・・・やってみればいいわ。」

桜は静かに言った。「人間に私を倒せるかどうか。」

その瞳は・・・金色とビリジアン・ブルーを混ぜた色の瞳。

「・・・・・・できるさ。」

既に背を向け、天空へと帰ろうとする彼らの姿を見つめ裕希は叫んだ。

「俺は負けたりしない、守ってみせる、取り返してみせる・・・俺の大切な人たちを。」

「See You。」

既に姿が見えなくなった天空から柊の低い声だけが舞い降りて来た。

桜の花びらと共に・・・

そして、人々は待つ。

『闇の光』ではなく『陽の光を』。

第1部完 BGM：『A・B・S』

6・満月 - 2 (後書き)

『夜叉 3』の原稿が―――っ!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6660m/>

MOON-4 夜叉<9>第1部完

2010年10月10日14時04分発行